

別記様式(第4条関係)

会議録

会議の名称	第2回加東市教育振興基本計画策定委員会
開催日時	平成27年9月1日(火) 14時00分から15時47分まで
開催場所	社福祉センター 2階 レクリエーション室
<p>議長の氏名 (委員長 大島巧男)</p> <p>出席及び欠席委員の氏名</p> <p>【出席委員】 12人</p> <p>吉川芳則委員 大島巧男委員 浅川るり委員 松岡博文委員 眞海秀成委員 安原一樹委員 竹内守男委員 上月嘉和委員 南中輝代委員 安田誠委員 石田れい子委員 服部雅幸委員</p> <p>【欠席委員】 1人</p> <p>土肥貴雄委員</p>	
<p>説明のため出席した者の職氏名</p> <p>なし</p>	
<p>出席した事務局職員の氏名及びその職名</p> <p>教育長 藤本謙造 教育部長 堀内千稔</p> <p>教育総務課 課長 大橋博英 同 副課長 中西 互 同 副課長 柴崎俊之 同 主幹 山本幸平</p> <p>学校給食センター 所長 山田修詩 学校教育課 課長 登 光広 生涯学習課 課長 黒崎徳弘 人権教育課 課長 広西英二 中央図書館 館長 大橋正明</p>	
<p>議題、会議結果、会議の経過及び資料名</p> <p>【議題】 議題等 第2期「加東市教育振興基本計画」骨子(案)について</p> <p>【会議結果】 資料1～3に基づき、審議しました。</p>	

【会議の経過】

1 開会

2 議題

第2期「加東市教育振興基本計画」骨子（案）について

〔資料2に基づき、事務局から概要説明〕

（委員）

小中一貫教育は、もう実施するということが決まったのですか。

（事務局）

現在、平成33年度に先行校を開校して小中一貫教育を進めていくということで決まっております。地域の順番であるとか建設場所については、今後、地域協議会等の意見を踏まえて年度末までに決めていくということにさせていただきます。

（委員）

その方向で加東市としては進むということに決まったんですね。その前提で、話をするということですね。それで、小中一貫教育についてはメリット、デメリット、いずれもあると思います。これについての準備も大変だと思います。子どもの問題であるとか、それから立地条件の課題であるとか、第一、それ以上にその教育を進めていく先生方の、ずばり言って能力、それが一番大きいんじゃないかというふうに思います。全国的にもいろんなところが実際にやってる例もあるし、そんな中でいろんな特色、今、話されましたけれども、簡単にできるものでないというようなことがたくさんあるように思います。検討の中で出てくると思いますので、そういったあたりを丁寧に答えていただきたいと思います。

（委員長）

他に御質問等がありましたら。

無いようでしたら御質問等は終わりとさせていただきます。今、委員さんがおっしゃった、進めていることを前提にするなら今後が大変だということを十分教育委員会も認識して進めたいと思います。小中の先生方の研修とか、一番下に今後の計画というのがありますけれども、教職員の十分な研修であるとか、あるいは今後課題をどういうふうの一つひとつクリアしていくのかというふうなことも大切だろうと思うし、一覧表の白い部分の一番下に地域推進協議会っていうのを各地域で立ち上げていただくのが今後これからの大きな仕事だろうと思っておりますけれども、そこでいろんな意見を聞いて、地区ごとあるいは地域ごとで課題が違ってこようと思うんです。滝野地域、社地域、東条地域、課題はそれぞれ違う部分があるということで、それらについても十分協議をいただいて進めてまいると、そういうことでございます。

それでは、続いて教育振興基本計画の骨子について説明をお願いします。

〔資料1に基づき、事務局から概要説明〕

（委員長）

骨子の中でも基本方針として5つの項目を挙げて、それに追加するという格好で、具体化するというような項目を今、説明いただいたんですけども、私どもは次回、それを素案としてまとめ上げていかないといけないという作業が残っており

ます。そこで、皆様方から今の骨子の案をお聞きいただいて、御質問とか御意見等がありましたら大いに御意見を伺いたいと思います。どの項目からでも結構でございますので、よろしくお願いします。

(委員)

正直言って、私自身はきれいにまとまりすぎて、わかるような、わからないような箇所が大分あるんです。その中で一つ聞きたいのは、基本理念の中の人間力の育成についてですが、人間力が大きな言葉すぎて私自身はわからないんです。人間力の育成について説明していただきたいなと思います。

(事務局)

第1期のときから人間力ということの一つ大きな言葉として使わせていただいています。これは内閣府の人間力戦略研究会というのがございまして、そのときに人間力というような言葉が出てきました。そこで決めている概念というのはどういうことかと申し上げますと、社会を構成し運営するとともに自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力。もう一度申し上げますと、社会を構成し運営するとともに、要するに、社会の中で生きていけないといけないということが一つですね。同時に自立した一人の人間として、しかも力強く生きていくための総合的な力というふうに定義としてあります。小・中学校の教育の中には、いろいろ社会の基盤になる最低の力ということで人格を含めてですが、そういうふうに構成していくということは大きな役割になっておりますが、それを含めて人間力というようなことで表現をさせていただきます。とりわけ、この頃よく言われたのが、生きる力ということを言われましたから、それも含めてここにある力強く生きていく力ということで、総合的に一致するというようなことで人間力という定義をさせていただいたところでございます。

(委員)

言葉的にはきれいにまとまって、わかるような、わからないような気がするんです。私もスポーツをやっていますので、スポーツをやる人間にとってはまさに今言った人間力というのが全部含まれてるんです。自立するとか強く生きるとか、勝ち負けではなくてその先には世のため、人のためというのがスポーツをやるところの中にも基本的にあるんですけども、これは子どもに求めるものですよ。教える先生方が、この基本理念を追っていくということですか。

(事務局)

基礎学力、基本的な学力というものがもちろんベースとしてあるわけで、その一つの要素として学校では基本的な学力、思考力等ももちろん高めていかないといけない、あるいは他人とのかかわりにおいて思いやりとかそういう心豊かな人間になっていくことも、心も必要であろうとか、あるいは今おっしゃっている体力的な面とか、精神力というものもあるでしょうし、ひいてはそういったことに対して興味、関心がなかったらいけないというような、そういうことも子どもに当てはめれば必要というふうには考えています。

(委員)

実はスポーツをやっていると思うんですけども、技を教える人と道徳的なことを教える人、本来なら一人の人であるべきはずなんです。いろんなスポーツを通して道徳心を教えるとか。ちょっと私の反省も含めるんですけども、勝ち負けにこだわり過ぎて礼儀とかの教え、指導者のほうにもちょっと足りないものを感じることがあるんです。やっぱり子どもを育てる中で、私はスポーツを通してなんですけれども、私達指導者もあえて勉強する機会を持たないと、本当の意味で子どもを指導していくと大きな声では言えないんじゃないかなって感じているんです。そういう意味では、加東市としてはスポーツを教える指導者に対してもあえて礼儀、道徳心

を教えてくださいというような一つの指導があったら、恥ずかしい話ではあるんですけども、勝ち負けにこだわり過ぎて、そういうのも見落としてる部分があるかなというのがあるので、今後そういう指導も地域を通してですけれども、やってほしいと思います。

(委員長)

昔、文科省が生きる力ということで大いに日本の子ども達に生きる力をつけさせたいということで、いろいろ言いましたね。それを簡単な言葉で言うと3つの「たいりょく」というふうな言葉で表現なされた方がいらっしゃいます。1つは体の体力、2つ目は忍耐力、それから友達と調和したり、いろいろする連帯力、3つの力というのが、この3つの生きる力というのは、この3つの言葉で統合されるんじゃないかと言われたことがありましたけれども、このまさに人間力というのはそういうのではないかと思うんです。

(委員)

今さらながらなんですけれども、人間力というのは妥当な日本語なのかということが、ずっとひっかかっているんです。人間力と言われると、何なのかなど。だから、具体的に何々の力というのは……。使うんですよ、人間力。でも、例えばこれを外国人に説明するとか、そもそも人間力って何ですか、簡単に言ってくださいよと言われたときに、簡単に言えないんです。ずっとひっかかっているんです。そもそも人間力というのは、日本語として妥当なのかどうかというところも、正直まだすっきりしないのですが、国語としては正しいんですか。

(委員)

もともとあった言葉ではなく造語ですから、違和感があるのは当然で、国が使っていて、それを受けてこういう計画をつくる場合、それと連動で使う分については問題はないと言いたいんですけど。私は個人的には使いませんが、造語だということをわきまえた上で、意を明確にした上で使う分には、国との連携がとれてる分には、損は生じないでしょうけど日本語としては新しいものです。違和感があるのは当然だと思います。

(委員)

言葉はどんどん新しいもの出てきますが、今後こういうことを定着させていくという捉え方もできるかと思うんです。

(委員長)

外国の人にこの人間力を説明するのに「ヒューマンパワー」なんて言ったってちっともわかりませんね。ということは、人間力を育成するんだって言っても、どういうものを育成しないといけないのかというところをしっかりと踏まえた上でこの言葉を使わなければということで、スポーツをやる、あるいは勝敗にこだわらないということ、あるいは友達を思いやりったりそういうあらゆるものを踏まえた人間力であげればいかと。そして今、委員さんがおっしゃったように、人間力というのは後にできた言葉ですので、それを十分に理解していただくということも大切なことではないかなと。我々、今から素案をつくっていく上で人間力というものをうまく説明していかないといけないという思いもしますね。

(委員)

人間力というのは、いろいろな観点があると思います。私は、最近特に気になって仕方がないのですが、地域が特に地方消滅であるとか、地域の衰退というか、そういうことが随分話題になっています。人口を増やすために、活性化するために行政とかもいろいろ工夫してアイデアを出してされていますけれども、それだけで本当にいいんだろうかと。私が思うのは、気の長い話だけれども、やはりこの社会を支えていくのは、子ども達が学習をしながら大人になったときに、いよいよ力

を發揮する。ということは、やっぱりこの先を読んで子どものころからそういうふうな視点を入れておく必要があるんじゃないかと。国のほうでやられておるかは別にして、やはりこの加東市においても早速そういうふうなことが10年、20年先には起こってくると思うんです。そしたら、今、小学生が10歳だとして20年先というたら30歳、その子達がこの地域に残ったとすれば、やはりその人達が地域を本当に思って、工夫をして活性化したり、またはこの地域で新たな企業を起こしたりとか、何かそういうことをしてくれないかと、この地域がいよいよ衰退してしまうと、そんなことを思うと是非、この教育の中の、難しいかもしれないけれど、小学校、中学校、それからちょっと話が飛んでいきますけども、ここの対象として、学校教育といった場合には、小学校、中学校、飛んで大人の教育なんですね、でもこの加東市には高校生もおります。場合によったら大学生もおるわけです。そういうふうな人達を直接教育するというのではないけれども、そういう人達を巻き込みながら小・中学生とともにこの地域を将来的に考えていくような、そういうプログラムですね、これを入れたらどうかなというふうに思うんです。これが1つです。

もう1つは、このグローバル化という言葉が出ておりますが、このグローバル化ということになるとすぐに外国語の教育というふうになってしまうわけですが、実はこういうふうな言葉が出てきたのは、企業がどんどん海外に出ていく、そういった中でまた海外の国が日本以上に、後発の国であると思っていたのが、新興国と思っていたのがどんどん日本を追い越していく、そういう状況の中でやはり日本自身が今後も世界で名誉あるといいますか、そういう影響を占めているために人材は必要だと。そのためには何が必要かということ、海外との交流という意味で語学を通じての交流も必要ということですので、それと共に、日本人が新たな事柄を考えて世界をリードするようなものをつくっていく、そんなことが大事やと。そうすると、国の指針の中でも言われているように、科学教育、こういうようなものは必要であろう。これについても、どうも理科とか数学というのは苦手だというのが今の傾向のようなんですけど、この苦手だということ、好き、関心を持っているというのとはちょっと違う部分になりますので、小学校から中学校、それから高校生、あとは地域の企業の研究者などを巻き込みながら、そういうようなものに関心を持たすような授業ですね、そういうものを是非この中に入れていただきたいなというふうに思います。私が今言っておりますのは、そういうふうな人の、レベルの高いことのみを期待しておるわけではありません。やはり基礎、基本というのが、これは何をおいてもきちっとやらないといけないわけです。それをどういうふうに決定するかという、そういう方法はいろいろ考えられるようですし、実際されておりますので安心しているんですけども、そういった中で今のような視点を是非入れていただけたら、もう一つまた加東市の教育、面白くなる。また場合によったら域外からも学びたいというような子どもが入ってくる可能性もあるとかというふうに思いますけれども、いかがでしょうか。

(事務局)

委員さんが御指摘のふるさとへの還元ということで、先ほど、小中一貫教育の中で5つの柱のうち、キャリアと社会的自立ということとグローバル人材ということで御説明させていただきましたが、まさしく教育委員会として考えてございますのが、委員さんもおっしゃったことと全く一緒なんですけれども、まず、ふるさとを愛して愛着を持って自分の足元を見詰められない子は社会的自立ができないだろう、その上に立って、将来例えば自分の進路を決定したりとかということにいくと思います。そのために先ほどから申していますが、ふるさと学習「かとう学」というのを教科横断的に行うことによって地域を学んで、地域に学び、その学びを地

域に返していく、そうなれば例えば将来的に社会教育の課題でも出ておりますが、例えば御退職の後、自分の経験なりを地域へ還元しようというところの自分の生き方につながっていく部分を大切にしたいなと思っております。キャリアというのは、結局は自分自身が見詰めて、自分の生き方であるとか、社会的役割というのを自覚していきますので、それは発達年齢、発達段階に則して、それぞれその時々であるものです。その積み重ねというのがそういった社会的自立につながると思っています。

それと、義務教育9年間という話なんですが、当然高校生、大学生、加東市にはおります。そういうふうな方々も住んでいらっしゃいますし、例えば兵庫教育大学を卒業されて、そのままここで就職して、一生というような方もいらっしゃるようです。そういった方々が本当に加東市のためにどう自分が役割を果たしていくのかというようなところを大切にしたいなと思っております。

それと、2点目の理数教育の充実ということで、当然そのグローバルで生きていくためには英語は必要なところなんですが、基礎、基本、特に理数教育への興味、関心というのは国もそういった方向を戦略と考えておりますので、大切にしたいなと思っております。実施計画の中では、そういったところは明記させていただこうと思っておりますので、また実施計画のところでお確認をいただけたらと思います。ありがとうございました。

(委員長)

グローバル教育は、決して英語教育だけではない、外国語教育だけではないということで、今、海外に発信できる科学教育も含めて何をするかということもどんどん今度の素案の中に盛り込んでいただけたらということでもあります。

(委員)

大体、基本的なことは全部網羅されていると思います。私がいつも、今この時期、時代に考えているのは、家庭の教育力が落ちているのではないか、落ちているところと高いところが両極端になっていて、なかなか家庭の教育力というのがない家庭が多くなっているのではないかということです。その辺はやはり家庭教育力の向上ということで、子どもの生活環境がいろいろな家庭が多くなってきていますし、一人親家庭とかも増えていきますし、核家族も多いですし、そういう中でいろんな関係機関と協力して見守り体制というのが本当に大切だなと思います。地域で見守るといってもとても大事なんですけど、やっぱり自分自身が自分をどう守るかという教育も大切ではないかなというふうに思います。地域に見守られていることも大切だと思うんですけど、自分で自分を守る、大人だからだけではなく子どもでも自分を自分で守るといのが本当に大切なことなんじゃないかと思います。そういうことで家族、家庭で保護者が子どもと一緒に子どもとコミュニケーションをとりながら教えなくてはいけないんじゃないかなと思います。今、情報機器が発達して、LINEだけで親子がつながっているという感じで、家で時間もばらばらですし、会話をしないという家庭も多くなってきているような気がしますけれど、その辺もちょっと考えていただきたいなと思います。

(委員)

私もまさしく委員さんが言われましたように、教育委員会のほうからも心の面の充実ですとかという説明があったんですけども、本当にいろんな保護者とかかわっていく中でやっぱり実感する部分が結構ありまして、はっきり言いますとその点がやっぱり落ちている、相当多様化している。こういう状況の中で、最近の話題でしたら、寝屋川で子どもさんが亡くなったのも深夜に、普通は考えられないと、そういうようなことがやはりその家庭の、家庭が原因なのかと言えばそうなのかもしれないけれども、いろいろそうさせた社会もあったり、いろいろあったりするのはよくわかるんですけども、やはり家庭としてどうだったかということもやっ

ぱり関係してこないといけないというようなところを感じているところです。そんな中で家庭教育、家庭の教育力の向上というところをちょっとできたら厚くしてほしいなというような思いがあります。学校に子どもを預けていたら子どもは成長するんだと、そうならないようにやはり学校と地域と家庭がやはりうまく連携をしないと子どもはだめなんだという部分で、ややもすると教育計画になってくると行政的に自分らはこれだけやってるんだという話になるんですけども、やはり家庭もやろうというようなところをうまく表現できたり、なおかつそれが方針になったらいいのになというふうに思っております。

今、委員からもスマホとか携帯の話が出ましたけれども、やはり道德、ここにも小中一貫教育の説明にもありましたけれども、あるいは道德教育、私らは小学校のとき、40年ほど前なんですけれども、国語とか算数の時間を流しても道德をしたという、この先生道德ばかりとかというような経験を持っているんですけども、やはり今、50にもなって同級生とかといういろいろ話をする中で、あのとき道德ばかりやったなというふうなところで人は繋がってるのかなと。それが根底に、学力向上の根底にはあるのかなということで、道德教育はやっぱり充実してほしいし、そのあたりを厚みも持たせてほしいなという思いもあります。特にインターネットの中傷等もいろいろありますので、特にお願いしたいなというのが一つあります。

委員が言われた子どもの指導とか、かかわり方とかというところは非常に私もわからないまま子どもが中学校、終わってしまって、結局何だったんだろうなという状況になっているんですけども、私はあまり子どもには言っていないです。それは意図して言っていない。中学校のときも部活の顧問の先生があえて、いわゆる指導に来られなかった、それがやっぱり卒業してから部員で話をするときに、やはり自分達はそれによって自治力というか、自分達でどうするんだというところの力が身についたというのは、野球部の部員で確認しているところで、部活のときからやっぱり親の外圧とかもろもろあって、見ておかないといけない、ノルマ重視のような形の先生の指導が変わって、もうちょっとそのあたりはお互いに先生と父兄とが、そのあたりもうちょっとわかりやすく相互理解ができて、本当の指導とはどれだけ距離を置くことが大事だという感じがしています。

(委員長)

現に子どもを子育てをなさって疑問に思うこと、あるいは強調したいことについての説明をつけ加えて言っていただきました。3番の4番までは、教育力の向上という部分について、今のご意見を参考にしながらよろしくお願いします。

(委員)

人口減少について、ウン十年前にはどの家にもおじいちゃん、おばあちゃんがいて、若いお母さんがいて、子どもがおる、赤ちゃんもおるというような家庭が我が地区でもありました。現在は、若い者が皆出ております。大学へ行ったら恐らく帰ってきません。これでふるさとへの学習をすごく、ものすごくしてもらわないとこちらに帰ってこないと思います。帰ってきても仕事がないというのですか、そういうような現状で、どこの家も皆おじいちゃんとおばあちゃんとかばかりというような現象が続いております。空き家もたくさんできておりますので、本当に教育云々、少くらの教育ではもとに戻らないんじゃないかと思っておりますが、この時点で家庭の教育も低下しておりますし、本当に頼るべき人が地域にないというような状態で、本当にすごい力を入れて教育をしてほしいなと思っております。私もどうしたらよいかわかりません。

ただ一つ、私が思っていることは、子ども達は4年生ぐらいの力があれば生活できるというようなことをよく聞いておりました。だから、学力をつけるよりも、ま

ずその人間としての力、言葉、それから態度、そういうのを今の時点で今の子ども達にはとにかく基礎、基本が大切である。とにかく今、言葉は割に少ないですね、このネットか何かして、お母さんにおかわりというのもメールでして、お母さんが黙って入れている、そんなこともあると聞いております。だから、言葉をうまく使える、相手の気持ちがわかるというような、困った中でもできることはやっていて、よりよい加東の教育につなげていけたらいいなと思っております。

(委員長)

今の子ども達が10年、20年、30年先に、加東をどういうふうにしていくのかというふうな力、それが今の委員に連動しているような気がいたします。こういう子ども達を育てるといえるようによろしくお願いします。

(委員)

小中一貫教育ならではの取組等なんですけども、そこで5つの柱と言われましたが、今回もこの基本方針の5つの柱とはほぼ同じものと理解したらいいのか、それともやはりこれは違うのか、それをお聞きしたいんですけども。

(事務局)

5つの柱は、学校教育上の柱でございますので、今回加東市の教育基本計画ですから、御説明申し上げたとおり、社会教育、生涯学習の面もでございます。ただし、学校教育が大きな側面を維持しているというのは確かでございます。学校教育を中心にその支える仕組みづくりであるとか、当然それが例えば地域の教育力の向上につながってまいりますので、自ずと一致するかなと思っておりますが、ただそこに別の分が入ってくる、人権の分であったりとかというのは当然です。生涯スポーツの部分も当然入ってまいります。

(委員)

それと、私も人間力というのにこだわっているんですけども、私も前回の会議のときで子どもに係る人間力、それと教師に係る人間力、加東市民に係る人間力という説明を受けたとは思いますが、そういう点を入れていただいたらうれしいなと思います。

それと、私自身も人間力というのは自立した人間というふうに捉えたらいいんじゃないかと、それと生きる力を伸ばす、これがやはりとても大事なことだと思っています。それと、私も報道関係とか、先ほど言われたようにネットとか、確かにLINEとか、この問題はどうしても今一番小学校、中学校、高校等、ものすごく問題視されております。ネット見回り隊等も出ていると思うんですけど、文章には入ると思うんですけども、やはりその辺が今一番子ども達に脅威であり、親達の心配、全てにここはまずかかってくると思うので、その辺のこともきっちり入れていただいたらうれしいです。

(委員長)

他、何か御意見、御質問等がありましたらお願いします。

皆さん、いいですか。人間力って書いて。

(委員)

人間力のひっかかりもあるんですけど、このまえ別の兵庫県内の同じようなことをやっている自治体ですごく感じたのは、守りなんです。変化している現状や変わっていていることについていけないというのは、その人間でない私が専門員としてかかわって見え見えなんです。でも、その守るといえるのが何なのかということに対するコンセンサスもなければ、それを正しいと言っている人達は、じゃあそれを正しいということと言えるだけのことをしてきたのかということもないです。この加東市の分も一緒だと思うんです。今から、例えば子ども達の情報環境とかかなんとかっていうものを批判したり、それを鍵をかけるとか、あるいは利用状況等、

子ども達に言ったらそんなの全然どうぞって感じになりますよ。もっと先に行くんですよ、どんどん。だから、我々がしなければいけないのは、今後の加東市が教育でどういう子どもを育てていくのかという明確なコンセプトや、きちっとした理念哲学を持つことと、言葉がなかなか難しいんですけど、我々自身が既に持っていてしまっている旧態依然たる発想や、立ち位置や、価値観や、そういうものをちょっと横に置かないといろんなことが後手後手なんです。ネット対応というのはまさにそうなんです。うちの大学に来て話をしてくれた専門家に聞いても、結局教育の人達って、申し訳ないですけど、もうだめですよと。というのは、後から後から言うだけで、全然現状についていてないじゃないですかと。問題が起きたらそれがあから問題だって言うけど、じゃあ、あなた達だって使っているでしょうというような。しかも問題状況から言ったら、全体から見たらほんの0.0何%を問題にして、だめだとか禁止だとか取り上げろとかって言うけども、大体そんな発想はだめですよって言われるように、僕もそうだと思ったんです。だから、やっぱり我々も少しもっと素直に変わっていった世の中が、子ども達の生活や今後の見通しとかっていうものをきちっと理解したほうがいいんじゃないかという気が、個人的にはします。

(委員)

今、おっしゃっていること、私も常々思うんですけども、教育を考える場合は10年、20年先の世の中を想定して、それにうまく適していけるような、対応していけるような人材を育てるといことも大事だと思うんです。いろんな分があると思うんですけど、その中でもう一つ取り上げて最近思っているのは、実は私も年をとってきまして、いろんなところが痛くなってきて病院に通うことも多くなってきたんです。この世の中ではやっぱりいろんな意味で税収の減少であるとか人口減になるとか、そういったことがこの医療費の支出においても見直そうと、そういう時代と思うんです。そういうことを考えたときに、今からますます高齢者が増えていきます。また、確実に小さい子どもであってもいずれはそういうふうになっていくんですけど、そういったときに特に私自身振り返ってみると、小学校教育における体育って何だったかという、体育の時間になると競り合わせて、そういうふうな体育の得意な者はどんどんそういうところで選手になっていくけど、それ以外の者は傍観者になってしまって、こういうような年になったわけで、そうすると年をとってもやっぱり運動というのはあまり好きでない、そういうふうな人間。それと片や、とても好きな人間、この2つに分かれていってしまう。ところが、年とっていろんな情報を得たりしますと、やはり年をとっても体がうまく動く人というのは、子どものころから運動をしていた人、それもスポーツの選手でやっておったというんじゃないしに、運動が好きでやって、例えば年とってウォーキングをすることとか、ちょっと散歩をすることとかというような体を動かすことが好きだと、そういうふうな人達が元気でおることができる。そんなことを聞いたときに、これ小学校、中学校、子どものころの体育の教育というのは、どういうことを目指さないといけないのかと。これが当たっているかどうかわからないんですけども、やはり一つは運動が好きとか、一生自分の体を無理なく動かし続けるようなそういう基礎をつくっておくということが非常に大事じゃないかと。それと、食べ物のことですね。年とってから気がついて習慣病や、食べ物、そんなこと言っても遅いんですね。もっと子どものころからやはり難しいことだけでも、やはり健康ということ意識しながら生活するような、特に食べるものについて、食育というのも書いてありますので、その中でただ珍しいものを一緒に食べるということになしに、その背景としてやっぱりそういうふうな将来への橋渡しとしての教育があるという自覚のもとに展開される、何かそういうふうなものを入れていただいたらという感想を持っておりま

す。

(委員長)

今、御意見を伺ったのは基本方針の2番目の3つ目、心身の健康増進、個性の伸長という欄に当てはまると思いますので、それも今の御意見も網羅していただけたらと思います。

また、家庭教育をするのは昔と変わっているんだと、それを十分踏まえる必要があるということ、守りの姿勢ではだめだというふうなこともおっしゃったように理解しました。

(委員)

先ほど人間力の育成のところ、力強く生きることという言葉もあつたんですけども、私のおじがいつも一言書いているんです。めげない、逃げない、くじけない。やっぱり立ち向かおうとするからそういう言葉を書くんです。でも私はあえて、おじに反対して、めげたい、逃げたい、くじけたい、人間だものというふうにいつも言い争うんですけども、自分が力強く生きるという言葉はわかるんですけども、力強く生きなさいというと、そんなこと知っているけれど違うでしょうって、いつも自分の中で思うんです。つまり、弱い自分も受け入れることが人間力の育成になると思うんです。何かそのところが、強く生きなさい、生きなさいって言われると実は私は子ども相手をする仕事をしていますので、違うでしょうって、弱い自分もそれはあなたですよってそういうのを受け入れて初めて強い人間になるんだよって、教育者の皆さんも十分承知かと思うんですけども、あえてそういう言葉も明記してほしいなと思うときがあるんです。それで、弱くてもいいやっていう、何かそういう安心感を文字を通して感じることもあるのが正直な話です。

実はそういう大人の言葉というのを、実は今日経験したことなんですけれども、これはちょっとぐつとくる話で、3年生の男の子が1年生の女の子に対して、その男の子は空手を習っているものですから遊んでいるうちにちょっと蹴りを入れたんです。それを見ていた私は、女の子に本気でそんな蹴り入れちゃだめよって言ったら、その子は何と言ったと思いますか、皆さん。考えてほしいんです。3年生の男の子が、本気じゃないもん、浮気だもんって言ったんです。私それを聞いたときに、大人がもっと責任のある言葉を子どもの前では発していかないと、きれいな言葉を並べても絶対通じないって、すごく思ったんです。その子に対して私自身耳を疑ったので、もう一回、今何て言ったって。本気じゃないもん、浮気だもんって、3年生の男が言ったんです。私は蹴られた女の子を抱きしめるよりも、ついその男の子を、いつもその子と遊んでいるものですから、後ろからぎゅっとやってしまいました。女の子も蹴られて泣いているんですけども、何かその言った子どもが、お父さんに育てられている子なものですから、何かそういう自分の家庭の中で得た言葉を言ったのかなと私自身は感じたんですけども、小学1から3年生までの子どもって、私達大人が思っている以上に大人の言葉を敏感に感じていますし、すごい考えてます。何かそれを考えたときに、この教育を語るということはとても大事なんですけども、何か、もっと本気で子どものことを考えてほしいと、それは一つのお願いなんですけれども、それは切に思いました。

私がもう一つ聞いたかったのは、第1期の基本理念と2期の基本理念の言葉が同じですよ。1期でこれは自信があるんだと、1期でなし得た項目はこれだっていうものがあつたら教えてほしいなと思います。これだけは自信を持って基本理念に従って教育しましたよっていうところがあつたら市民代表として一言聞きたいと思います。

(事務局)

学校教育として先ほど小中一貫教育の話と絡めてお話をしたんですけども、義

務教育9年間で子ども達がどんな力をつけるかというところで、自立という言葉を使いました。子ども達には人間力は当然、自立がベースに流れているということでお話をしました。それで、小中一貫教育で一番大切にしたらいいことということで特色ある取組みが、4と5の柱をしておりますが、1つ目の自尊感情のところできどくといえますか、力をこめて説明をさせていただいたことがあります。中学生を見て小学生は憧れの存在です。中学生は小学生に頼られることで自分達に自己有用感が生まれるとかというような、自己有用感、自己肯定感のお話を差し上げました。今そういった相手に対する例えば思いやりであるとか、いたわりの心であるとかというのは、先ほど委員の道德の話でもありましたけども、今の加東市の子ども達には、力がついていないところっていうところで考えてございます。自尊感情の話と絡むんですけども。

第1期のところで私どもは体験学習というところで、例えば小学校3年生で環境体験をしたりとか5年生で自然学校に行ったりとか、体験を通して学ぶというところを大切にしていきました。学校教育のところで大きな成果を上げている一つに体験学習の充実というところ、第1期のところであげました。その成果は確実に上がっております。といいますのも、子ども達が体験を通してまず体感する、体感してからその中で学ぶ、その学びというのが自然体験だったり社会体験だったりしまして、当然その中には友達とかかわる、大人とかかわる、小さい子とかかわるといいう、人間とのかかわりがあります。そのかかわりの中で先ほどの具体的な例がありましたけども、例えばトラブルが起こったりとか、それを自分達の力で解決をしたりとか、こういうことを言えば友達は悲しむとか、こういうことを言えば自分が喜んでもらえるとかというのは体験でしか学べないところだと思います。委員がもう一度言うてごらんというような指摘をされたわけですね。そのときのお顔は、多分そういうお顔をされていたと思います。その子にとっては体験を通して学んだと思います。ただ、それが1回だけではないです。それがいろんなところでいろんなことをすることによって、集団の中で育っていくっていうことを学校のほうでやりたいということで体験学習を重点的にするっていう目標は第1期のところでは十分に達成できておりますが、ただ、それだけでも足りませんので小中一貫教育をやりたいというような話にもつながってまいります。

(委員)

加東市の人口が増えているのを新聞で見たときに、よかったなと思います。村のことを考えてみると非常に違うんですけど、息子がこの間加東市に帰ってきました。なぜ帰ってきたのか改めて考えることもなかったのですが、ずっと加東市へ帰ってきたいと言っていたと聞きました。そういうことを思うと、なぜ帰ってきたのかを聞きたいものですが、今日のふるさとのところもありますけども、やっぱり加東市で生まれ育って、やっぱり加東市で何かしたいというときに加東市のよさをどういうふうに見るかということ、これが非常に大事ではないかというように思います。それと、一つは加東市のどこがいいかということは子どものときから何かやっていたほうがいいと思います。それと、2ページのところにありますが、これ見たときに、前の1期とどこが、どう違うのかとにらみつけたら、学校の役割の中で特に道德心をと入っていますが、前のときにはそんな言葉がなかったので、今の時代は道德心が大事だと、これは基本方針に書いてありますのでそのとおり。

その次の隣の、家庭の役割というところで、生活習慣に入っていますが、食育とか食に関わること、私もこの年になって思うのですが、相当前から自分の食べることについて非常に興味ありまして、するんですけど、この食については家庭の中でも、家庭で役割分担したりして、いろいろ考えていくと、食べること以外になかなかないじゃないですか、生活の中で。食について子どもとおばあさんや、家族の中

で、これしなさい、あれしなさいと、いろんなことやって料理もやると、トマト使えば、トマトはどこが日本一かと言えば社会の勉強にもなるし、レシピ見て2人を5人にしてと言ったら掛け算や足し算、みんな学ぶ、総合学習、最後の盛りつけは美術と音楽、考えたらその家庭の中で食を通してきっちりやっぱり学ぶこと、それから生活習慣、そういうものをどこで身につけたらいいかっていったら家庭と学校のこの辺が大事でないかと。

それと加東市の中に生涯学習センターがあるんですけど、その中で学ぶ人というのは加東市の人はいないね。三木の人が多いです。三木は高齢者大学卒業したら集団で来られていますね。加東市も高齢者大学あります。私達の年代は体力とか学びとか趣味や文化や言って、年とってきてすることがたくさんあったんだけど、若いときに仕事が忙しくてできん人も結構おられますので、そういう加東市の高齢者の学びのこと、それから県の関係のこと、いろんなところありますが、その辺のようなどこを体系的にもうちょっと整理して、年がいても体力やいろんなことをやる、地域の役割があると進めてもらえることをどこかにもうちょっと入ったらいいなというような思いがございます。

(委員)

皆さんが大きなところで、御意見を言ってくくださったので、そこは置いておいて、具体的には現行版の振興計画を改定していく方向で作業が進んでいくと思いますし、第1期のものであまり極端に変わると変な話なんで、10年間のスパンの中で中間地点で前期のことを踏まえて後期ということですから、それが全く180度とか変わってしまうと変な話ですので、基本的にはその流れに則していいんでしょうけども、その中でも先ほどおっしゃったように基本計画の部分の第2章ですか、現状の課題で第1期の検証なんですけど、ここのところで今、御指摘、委員もおっしゃっていましたが、検証に当たる部分をどういうふうに踏まえて、大きな流れは踏襲しつつも、どうそれを生かしていくかという、そういう記述が少し入って、その中に例えば学力調査だとか、学習状況調査なんかで得られたデータも入っているでしょうし、現場の教職員から5年間で短期的で出るものと出ないものとあると思うんですけども、子ども達の実際の様子などを聞き取り調査なんかして、そういうものを反映して検証するという手もあると思います。若干、客観性というか、そういうふうに後期、具体的にここを強調していきますよという小中一貫のこともありますので、そういうのを踏まえた検証がなされて、第3章以降の素案を考えてくださったらなと思います。大きなところで申しますと、先ほどから第3章は基本理念の人間力の育成が問題になっているんですけど、言葉は現行版でも丁寧に説明されていますので、ここは同じようにしてくださってもいいと思うんですけど。これは変えられないと思いますが、私はそのサブタイトルの部分なんですけど、学びから新しい自分づくりと地域づくりを目指す加東市についていう日本語がわからない。学びからというのは、この「から」はどこにかかっているのかということで、最後は加東市にと言っているのは、呼びかけているのか、誰に対して呼びかけていて、それを実現してる主体は誰、市なんだろうけど、学びから目指す加東市についていうのはちょっと締まりがわるい感じはします。先ほど言ったように変えられないので、変えなくてもいいんですけど、そういう意見は申し上げておいて、新しい自分づくり、この「新しい」というのは自分づくりだけにかかるのか、地域づくりにもかかるのか、この辺もわかりにくい感じがします。ですから、ちょっとそういうことがあるということ踏まえて、若干説明を文章のほうでされたらどうかと思います。

それから、大きなところでもう一つ申し上げると、委員のほうから、この基本方針は小中一貫教育のこのパンフレットにある5つの柱ですよね、こういった、9年

間でしていく、キャリア教育、それと重なるというか、同じものなんですかという御質問がありましたけど、私もちょっと、それは感じていて、一緒なんですけど、1番の基本方針の1番は、小中一貫教育を通して自立した子どもを育む、学校教育の充実ということで、ちゃんと小中一貫が柱に上がっているんです。その中に上がっているのは3点です。キャリアとグローバル化はパンフレットのほうの5つの中にも入っています。ところが、どこにも、例えば確かな学力と、それから自尊感情、それから心身というのは、この3つは2番に確かな学力云々の教育の推進、そちらのほうに落とし込まれてしまっているんです。パンフレットのほうは、カリキュラムのほうの全体像の中の5つの要素なのに、基本方針は小中一貫の中には3つしか入っていない。地域資産を活かしたという、柱にないものが1の(3)には入っている。ちょっとこの辺、ねじれがあるので、ここをどういうふうに整理をして小中一貫校を中心にするならするで、まず整合性、パンフレットは振興計画には載らないでしょうけど、こういうものが別に歩きだしたときに、その齟齬を指摘される可能性はあるんで、そのところはきちっとされたほうがよりいいのではないかなというふうに思いました。

それから、やや小さなことになりましたけど、まず基本方針1番の(2)グローバル化ということなんですけど、さっきここが御意見たくさん出ていましたけど、私もここ実際の文章になると、もう少し丁寧に説明されるかもしれませんが、この柱だけを見るとどうも英語教育とICT機器が使えたらそれがグローバル化になると、そういうふうな印象は受けます。理科教育のことも出ましたけれども、それも一つの要素でしょうけど、こういうものが出たときにひょうご教育創造の第2期、第1期もですけど、それから、こちらの資料3のほうです、裏側のほうに培うべき力というのがあって、そのキーワードに想像力とコミュニケーション能力っていうのがあるんです。やっぱりこのグローバル化ということは、英語を使うということは、コミュニケーション能力をとということを前提にしていると思うんです。ですから、国語教育の立場からいうと英語よりまず国語でしょうって言いたいんですけど、日本語でちゃんとコミュニケーションできないものが英語でできるはずないんで、ですから英語をツールとして身につけても日本語でできない人はやっぱりできない、そういうふうなことを思いますけど、そういうのは置いといて、英語を強調していくのは一つの売りですから大事にしたいんですけど、それをコミュニケーション能力を培う、その一環として英語教育を推進していくんだという文脈の中で語っていかないと、とにかく英語やればいいんじゃないかというふうに誤解されないような説明を本編のほうではして下さったらいいなと思います。

それから、次の(3)のふるさととことがたくさん出ていましたけど、ふるさと学習というのは、私は加東のことを知ること大事なんですけども、加東に住んで、加東を支えていく人材を育てるためだけのふるさと学習ではなくて、加東出身の子がアフリカにしようが、アメリカにしようがどこにしようが、北海道にしようが、私は加東、ふるさと、加東で育った、こういうそこで力をつけてもらった、そのときに支えになって今アフリカでもアメリカでも、生涯加東には戻らなかったけども生きていくことができた、そういうふうに言えるようなふるさと学になっていかないといけないと思うんです。それを、この加東という狭い地域だけに閉じ込めるようなふるさと学をやったのでは、それは先ほどのグローバル化と齟齬を生じる。そこは考えていらっしゃると思いますけど、そういうのをきちっと御説明して本編に書かれて、そして具体的にも施策にも反映して下さったらいいなと思います。

それから、4番の生涯学習のところの5番の市立図書館の充実があるんですけど、これは現行版と同じような文言を抽出して下さっているんですけども、このどこでも誰でもいつでも読書ができる環境、これは第一義ですけど、市立図書館を

単に読書ができる場というふうに閉じ込めてしまうというのは、先ほどの未来志向ということがちょっと遅れているということになってくるかもしれないんですけども、もっとメディアセンターとか、単に読書だけ、本編にもちょっと書いてありました、いろんな情報を収集、触れられる場という意味の図書館の機能はこれは不可欠だと思うんで、この読書というのはそういう意味も込めた広い意味での読書というふうに定義して下さったら別にいいんですけど、単に読むという行為だけをする場というのになっていくと、ちょっとこれからの図書館としてのイメージは狭いかなという感じがするんで。もっと図書館の概念を拡充していったって、子ども達、それから市民にとって憩いの場になるような、知的憩いの場になるような場所みたいな、そういう概念もこういうのを打ち出せていったらいいのかなというように、これは希望として、反映、実際されなくても結構ですけど、そういう考えがあるということで少しでも。ちなみにこの項目のところ、4番のだけれも、だれもと平仮名で続いているんですけど、5番のところだけ漢字になっています。これはちょっと、意図的なのかどうか分かりませんが。

文字のことでもう一つだけ申し上げますと、2番の(1)の矢印2つ目のところに教科担任制の充実や共同学習というところがあるんですけど、この「共同」がこれでいいのか、我々業界用語では一般に協力の協に働くという「協働」を使うんです。意図的に行政用語としてこれを使わなきゃいけないということだったら別ですけども、本来はやっぱり教育の営みとしては「協働」のほうが私はいいいのかなと思います。

(委員長)

ありがとうございました。

割と具体的なことについても御意見いただきました。

あと、この機会に本日はこういう意見も言いたいなというのがありましたらよろしくお願ひします。

それでは、一応、それぞれの意見が出尽くしたように思いますので、今回のこの骨子(案)をもとに素案を次回に雛形、案をつくっていただきますので、それをもとにまた皆さんに協議をいただくということで御了解いただけますでしょうか。

[異議なし]

(委員長)

それでは、本日の御意見をいただいたことによりよろしくお願ひいたします。

3 閉 会

【資料名】

資料1 第2期「加東市教育振興基本計画」骨子(案)について

資料2 加東市のめざす小中一貫教育

資料3 兵庫県と国、計画の推移

平成27年10月30日

委員長 大島 巧 男